



入 強

古今圖書集成
博物彙編
人事典
職官典
第十

不	乃	外
出		三 緣 山
三	清 凉 室 藏	三
中		
溪		




 13
 1626
 9止



小
夜
嵐
卷
中

小夜巻之才十

才曰十六 佛へ鬼の善行也

才曰十七 遊戯の事

才曰十八 連通の事

才曰十九 俗同春

才曰十 檢樂指

小夜巻之才十

才曰十六 佛へ鬼の善行也

縁山

才曰十七 遊戯の事

才曰十八 連通の事

才曰十九 俗同春

才曰十 檢樂指

才曰十一 佛へ鬼の善行也

才曰十二 遊戯の事

才曰十三 連通の事

才曰十四 俗同春

才曰十五 檢樂指

才曰十六 佛へ鬼の善行也

小夜巻之才十





知人の比獄の沙汰も後でいふ事と云ふ軍乱の夜中
よ人知ぬくらくる鬼たそことわぐは事ありし
何れぞ智略とわぐして打面ありや源義経公
任録の言而小竹付く心右盛形ありふと不便
本見の口つてつて成うへく先酒の事せ飲くりせ汝
が命と助け後うせんもかゝりふ人あはれぬ鬼
のひらゝた乃葉のやや中をさし合助を
らるるの事あはれ後とすもあはれい出く比獄中
野の末山の奥達て来つぬぞぬ不さくはりぬか
比獄中の沙汰も後でいふ事と云ふ軍乱の夜中
よ人知ぬくらくる鬼たそことわぐは事ありし

乃け岩の樹とらぐさひ。ちよろく川の荒れぬれど
いあまきぐとつていふは行よ共平時成務かられあは
いあまきぐとつていふは行よ共平時成務かられあは
の洞くこれ岩あまきぐとつていふは行よ共平時成務
あまきぐとつていふは行よ共平時成務かられあは
かゝりふ人あはれぬ鬼たそことわぐは事ありし
何れぞ智略とわぐして打面ありや源義経公
任録の言而小竹付く心右盛形ありふと不便
本見の口つてつて成うへく先酒の事せ飲くりせ汝
が命と助け後うせんもかゝりふ人あはれぬ鬼
のひらゝた乃葉のやや中をさし合助を
らるるの事あはれ後とすもあはれい出く比獄中
野の末山の奥達て来つぬぞぬ不さくはりぬか
比獄中の沙汰も後でいふ事と云ふ軍乱の夜中
よ人知ぬくらくる鬼たそことわぐは事ありし

わくもくつびあふ飲ぶ。頭ハ仰て服入るて是
ハ火無のやうなれはきく歩もあふかきかき
鬚々わくとして後へけり身ハ思まれば徳取
たつけへし。勝川勝作の書外およそ
日之書も。あつて小休度よいし。知月上旬に織
児乃成ハかたれた歩く。乃の果敢行ずして六月
下旬よらんばい対い。信大おん披落中。更ら
帝ハ養圃ありせし。糸と縁云く。いづく。奇物乃
志とく。いびけらわくれと忠いんよ。信大おん
能くして感あつ。いづら。織児も人教ハ初ら
鬼乃目めて洞と鬼ハ物見ハ老るハわの長を

あつて熱くまきしかるし。信大おん。いづら。あつて
は夜乃大あよた。いづれ。鬼切とたてん。お教
いれ。家へもまは鬼乃願。いづれ。信大おん。死骸立
てし。君もあつ。いづら。あつて。向て。あつて。か
いづら。あつて。いづら。あつて。眼ハ洞ハ保るけ
いづら。あつて。いづら。あつて。鬼乃目めて洞と鬼
や。肯て。禮せん。天人ハ平生の善と信。いづら。あつて。骸
と。いづら。あつて。鬼乃目めて洞と鬼。いづら。あつて。骸
と。いづら。あつて。いづら。あつて。鬼乃目めて洞と鬼。いづら。あつて。骸
いづら。あつて。いづら。あつて。鬼乃目めて洞と鬼。いづら。あつて。骸
いづら。あつて。いづら。あつて。鬼乃目めて洞と鬼。いづら。あつて。骸

真も天のつらき事なれは村のやう深きれは
とくく一人の心ね向時想ふ人のゆく量事
は陰陽神妻皆友と命く人あり候ハ是れ
より唯私法のみありてはいつて正路
急ぐとあてりすして私と念せば神妻
しつらとく速きは玉事ゆめくさるる
才早七 遊戯の事 伶人の舞

三帝卿一知よわの事せもい勅定もけり
の流衣家帯代末笑の働とく
と急ぐり素代乃流生の為
びのまゆ候もきこいよわ
量れ若患とつれ常

伶人妻のきもの
物な何とく催く
この勅定は月卿
希圖白のさゆい
とんげんよ向く
とて右舞由と名
かごさめらぬ
天橋のふり
心くせんしむ
あり教か人の
とくり橋より長
二百口格
の樂を
とく



本仏を比^ひてくやうきくもやふまじ

佛師

つゝ、釈迦^{しやくか}あまご人のあうせん

いでもせし鬼^{おに}のせうくも多人^{おほひ}内の

業^{わざ}繼^{ついで}

懐^{なつか}くは争^{まじ}々も色^{いろ}やいふまゐ

くろひの針^{はり}打ち^{うち}く人のまゝ

針^{はり}立^た

今^{いま}はらひのし金^{かね}根^ねのまゝり

比^ひてくまば珠^{たま}教^{がう}のま^まくもまゝり

珠^{たま}教^{がう}

わくまうまやしくやうくうまは

右^{みぎ}桶^{かづ}のま^まくく比^ひてく座^ざのぬけ

桶^{かづ}繼^{ついで}

鬼^{おに}のま^まくく傷^{きず}の切^{きり}くもまゝり

ま^まま^まひま^まる比^ひてくま^まま^まま

赤^{あか}子^こ

とくはうきくく神^{かみ}子^この舞^{まひ}夜^よ

目^めみはんぬ舞^{まひ}のわくま^まま^まま^ま

目^めみ

あ^あく^くま^まな^なら^らく^く身^みとて

い^いく^くま^まく^く人^{ひと}湯^ゆと^と鼻^{はな}の比^ひ繼^{ついで}

鼻^{はな}繼^{ついで}

の^のま^まお^おつ^つる^るあ^あの^のい^いあ^あ

比^ひてくあ^あま^ま地^ぢ籠^{ろう}と^と似^にく^くま^まれ^れ竹^{たけ}の

籠^{ろう}組^{ぐみ}

う^うく^く世^よ成^{なり}く^くま^ます^すい^いま^まは^はれ^れか^かこ

か^かく^くま^まの^のり^りか^かは^はけ^けく^くま^まま^ま

筆^{ふで}法^{ぽう}

や^やま^まこ^こら^らぐ^ぐと^と張^{はり}か^かめ^めす^すい^い

か^かい^いの^のく^く網^{あみ}と^と比^ひてく^くま^まま^まの

山^{やま}伏^{ふし}

ま^まま^まか^かり^りを^を舞^{まひ}く^くま^まま^ま



くまんののりきもやわらふびくが

徳母の元

掛くらげ喰うやぶら

やぶらふ比てくはちた酒長乃

酒作

もりのきくこの鬼あはれ

鬼ごころ肩ともがひさるがた

死体

やぶらちくやかりハミふい

もらぬ敷二百二十六はあな

誅

比てやぶらこのいふせとす

おしるこやぶらちくはまらぬ

漆

鬼もろくもふれあなごころ

くあわくやぶらちくぬ魔主

漆

ゆきすまのいづら

うねりかうこ事た破く怪くれまきく

まわりくやに初先の芝居とアなはら

才に十八連通のあし御幸の事

大將軍御集余もそ侍をいとは度おれ

つまよひく。伶人は舞まの色の

らび三もそとくわらもの。圓白敷下

まのりて琴とのこはととあんくの

くめらぐく儀うび来たし何と

と懸を後しごわくさぬく

くのお後くさげふるあり。情

小夜風

十一

機戸たぬ入道たぬと云々の末彦くわつてい
ふこゝの出入りけりいを法華の御心といふ
てし君とのたがれたる事か。安樂よけを代春
只神宮の権示給くし事とてはわかて。の
目か友か其の祝言へいあぐさるよ。必由能と
解さるしをを代りて。のよそののたあよ
くしつれいあよ。徳大おこし。めして
何いふ事と能とては。そのの世あふ機戸
戸上さふい先天坐最且吾物三國傳本へいよ
儀式とはいれ。のむ。のよ。之。前。之。式。二。番
し。と。祝。言。の。ち。ぐ。め。や。して。千。葉。の。代。舞。初

こゝはの教。天祚七代比。神代とて。天祚
而長。八番の。面。お。我。う。は。二。番。三。ハ。権。根。の。所
考。教。と。う。は。も。り。て。教。三。番。二。の。う。こ。い。の。ハ。多。世
尼。と。妻。し。の。ち。わ。ら。ん。あ。り。て。い。の。け。こ。い。ひ。く
の。と。と。や。り。納。の。根。根。の。施。ハ。何。少。く。も。因。の。度
白。多。し。二。番。よ。け。修。所。し。て。悪。魔。降。伏。の。事。と
拂。く。め。太。力。と。め。こ。う。矢。と。お。ら。思。わ。り。あ。ぐ。る。各。機
は。代。り。の。ち。の。こ。を。せ。ら。ま。う。し。事。た。と。ま。ひ。の。ち
は。ゆ。三。番。め。は。は。ら。う。と。て。新。女。の。情。と。は
し。こ。ね。々。何。あ。く。の。お。の。れ。ま。と。は。と。し。ら。う。と
徳。大。お。の。れ。ま。実。さ。は。ら。う。と。て。の。を。れ。い。の。こ

小夜嵐巻下

十一

と忠はくせありて人よき物なりとて
 其のよきをばとせしめしめし
 度くは付領の旗連北濱鼓打田太鼓并し
 阿弥とてはく則に能細修する幸儀アと云ふ
 少く頼義と云ふの如く連進のありし
 友舞者として十三月八橋ぐり
 をと較二百八十名程云阿の樂や
 りくまゝに實白夜ありしに内通と云ふ
 の趣は後より古の意あり人の内舞
 亦ありて感より人々は生れあはく
 人

ありし事しはよき事なれば教ふの
 かりけ友の旗の初てりありし人
 とは其の事ありしに教ふの事ありし
 たりし事しはよき事なれば教ふの
 と云ふにこそよき事なれば教ふの
 の内通ありしに旗連北濱鼓打田太
 りし事しはよき事なれば教ふの
 きて七月十二日辰の刻計は三
 卿ありしに月御手園星の
 大將軍の御ありしに入るに徳行
 存ありしに御ありしに入るに徳行



於麻心乃鬼とありはひと返上

田村を熟せと人ごころ能

うけらきいひは君のさしやう

あうらんごころもあかじ能

唐の能感陽交りやけはん

日介大和のあうりやうごさく

まは日若とまお事たうまの時分即能い

きいし衣物あうりまうりまうり能い

あうり侍の人ありまれ極成やまれのあま

何れしての小袖二ツ三のそう小借りま

うれと海へまれまれと能あうり者やま

まんまのくれり

ふれいかなきふの口をまにま

あやや非よりまぬが能

いばみまの能りまにまにまのあま

ままのいひま

才に十九 俗回答

け物能のぶとくれまのまのまのま

まの男男女女光あまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのま

まを思へまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのま



こころをくして身はけりいけりわあし先心とまのめ
 てみまへん過去未来のまこと。善悪同持せと
 此教のたゞしき者真寂寺に真性法師と云ふ人を
 とりて同魔王の者よつら同魔王の王冠と
 だけ禮してこそ安んぜ世界に元生悪業深重に
 して地獄に落ちる患とくは体と見せやなす
 たり。あつて月とてんくすれくつバも同魔王
 わつれお衆衆に官人よすなすくすあつて地獄とてん
 ころを東よあつてくつ二六地とありは地獄に
 このさういふ鉄より馬牛とありぬ罪人とぬとあ
 しあんどす罪人とこれいばあつて真性官人

是いふふと問はるに形とあつたれんあつたれん
 仏法といはれりやびして牛馬と商賣し或は責に
 るいふ科ことたり又あつて所とていふは門た
 んぬあり是と鐵卒とて焼く鉄のくつら
 かくこれと傳はるに問はるに不淨か何ぞ
 法修方何出候とてり或は疾友よころり
 徑とけりころ若たしと書つりをわつて焼く
 鉄のあつてつらあつてあり鉄のくつら
 とあり焼く鉄のあつてつらあつてあり鉄のくつら
 愚目とあつていふと及つてくつらあつてあり鉄のくつら
 とは同魔王と真性よ對して同魔王は華嚴の



后乃病卒安^{あや}^{あや}盡工乃奇物^{きぶつ}あまこも中^{ちゆう}る昔^{こき}
 江列志^{えりつし}賀乃郡^{かのぐん}一^{いち}道心^{だうしん}といふ老^{らう}信^{しん}を^をた^たり^り近^{きん}こ
 古寺^{こじ}ら^らし^しわ^わら^らご^ごの^の之^之多^たり^り乃^乃あ^あら^らし^しと^と詩^し
 の^の方^{かた}ら^らり^りな^なら^らし^しと^と我^{われ}信^{しん}を^を後^ごく^くま^まり^りて^て知^ちり^り
 苑^{えん}香^{かう}代^{だい}信^{しん}念^{ねん}仏^{ぶつ}三^{さん}昧^{まい}乃^乃乃^乃者^者一^{いち}心^{しん}不^ふ孔^{くう}小^{せう}信^{しん}極^{ごく}せ
 こ^こ或^{ある}時^{とき}京^{きやう}八^{はち}ゆ^ゆり^りれ^れあ^あり^りけ^ける^るを^を我^{われ}信^{しん}あ^あん^ん比^ひが
 こ^この^のま^まよ^よつ^つい^いき^き信^{しん}が^がせ^せん^んと^と又^{また}定^{じやう}業^{ごう}あ^あら^らや^やあ^あり^りを
 ひ^ひま^まの^の衆^{しゆう}乃^乃明^{めい}方^{かた}小^{せう}息^{そく}絶^{てつ}あ^あん^んぬ^ぬの^のの^のか^かあ^あひ
 う^うら^らが^が信^{しん}ま^まが^がれ^れい^いち^ちげ^げこ^こあ^あひ^ひま^まが^がら^らは^はし
 又^{また}志^し實^{じつ}乃^乃里^り八^{はち}を^を婦^ふも^もた^たん^んが^が東^{とう}あ^あら^らし^しと^とい^いふ^ふや^やら
 又^{また}あ^あら^らし^しひ^ひの^のの^のお^おら^らし^し香^{かう}花^かと^とそ^そま^まん^んと

信心方な故不浄如小依くしあうきんまら
しつたいく見しおんぐまけりあつてもあつて
小依くつと看らるあよ。京より使来てた心が
あつて死つたあつてはが心様と個よりたれたあ
つてわらまらび生つて心してせざりまらやありて
心付常く思ひし事こそ是かれ病の命ぬき
やとれまら約々しあのみれぬをわら死の多んを
骨かれ古郷とをてづらいつたあわく命あ
くんと定かすれらうく不及。こくと信儀の三
つ信よりつたまらとつて死期たあつて信儀の
終あつてつて心付終あつて事定かたつて

じし教の中し信の念を掃きあへのかり
いし滅つくと縁人の事な心と多の山の事と
まありしあんとてかたつて送りあつて空よ
糸そいもの、花より異番董とけり信よ
くつて縁より阿弥陀如来親名縁至八事定
つて信小つとつていなりとて各人あつてつて
て感涙と流けるまらつてあつてつてつて
骨のあつてつて又色八舍利とあつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
小依のあつてつて希代の妙像なりとてつてつて

小依のあつて



